



子供讃歌（二三）

倉橋惣三

一二 家庭教育行脚

1 家庭教育振興運動

國外にいて思うと戀しい。歸つて見るとなつかしい。較べて考えるとこれではいけないと氣がつく。その氣がつく點は、あれもこれもである。しかし、世の中のことには心だけでは解決できない。少くも急には思う通りには實現し得ない。彼が高めもし廣めもし來た學校教育の理想は、設備の改善に財政を伴い、教師の養成に年月がかかる。費用もいらす仕度もいらす、どこでも誰でも、心一つで、それ／＼に振興できるのは、各家庭の教育である。しかも、その家庭教育の振興がすべての教育振興の基本であり、その家庭教育の中心は母性の向上であり、その最も大切な根本問題に、これではいけないと氣がつく。缺陷がいろいろある。缺陷が氣につくのは、他國の實際を見て來たからである。その缺陷を補つたり改めたりするのは、折角よそを見にやつて貰つたものゝ自國に對する任務でなければならぬ。但し、缺陷といつて、今までも無かつたのではない。補うといつて、まる輸入ではない。それどころか、離れて思い、改めて見なおした機會に、今迄氣がつかないでいた、戀しい、なつかしい美點もあり長所もある。但それが、自國特有のもの、世界に冠たるものと誇るのには狹隘な獨善だ。自國以外の世界を歩いたものには、もうあり得ない。

わけてもそれが家庭教育といつた人間性事象である。それ／＼異つているところはあつても、共通の人間的事實として一つである。共通の中に、傳統的慣習の相違があるだけである。慣習はそう深いものではない。強くはあつても歴史的社會的の異で、人間性の根の別ではない。家庭教育はひつき、よう親と子との間のことである。世界どこだつ

て、親子の情に變りはない。といつて、他國學ぶに及ばずといふのではない。それどころか、いろ／＼の形や色の違いを知つて、初めてその根にある同じものゝ深さが味わえるのである。異によつてこそ普通が見出だされる。異に捉われて普通に到らないのは掘り下げ方が足りないからである。というよりも、異の理解し方が足りないからだという方がよかるう。異を知らないでは普通を感じ得ない。多くの異を知るのは普通を會得するためだ。

日本の家庭教育の缺陷というのも、他國の家庭教育に較べて、その異を學ぼうといふだけのことではない。家庭教育というものは普通の人間性の發現の上に歴史的社會的なくもりと、かたよりがあることである。これは、學校教育の中に誤りや不足があることよりは大きい問題である。それは、その教育結果の問題である前に親と子の不幸である。親と子との別々の不幸ではない。親子の間の不幸である。教育的缺陷というよりも人間的不幸である。彼は、自分の國にある此の不幸を、以前から憂えていないではなかつた。併し、自分の家を離れ、自分の國を離れ、自分の國に歸り、改めて痛感したのであつた。外國の旅から新たに歸つて來た者のならいとして、彼も、同胞のために役立ちたいとあせつたが、その彼をして一番強く深思させたものは此の點であつた。こゝに、彼の『家庭教育行脚』が、機會を得る毎に、機會を追ひ求めては熱心に始つた。

丁度その頃、文部省が家庭教育振興運動を始めた。時勢であつたのだろう。彼の行脚は、それによつて機會を増し、休日休暇を殆んど皆そのために用いて、東西南北に馳け廻つた。後に、彼は文部省社會教育官を兼任した。社會教育は多くの方面に及んだが、文部省も家庭教育について意を用いたし、彼もこれを、家庭教育行脚（お役人としては巡視か？）に利用することを忘れなかつた。それが、どれだけの結果を擧げたかは分らない。又分るものでもないが、母達と語るほど楽しくも又語り甲斐のある思いのした事はなかつた。母に語るより母と語るのが彼の心願であつたし、その母一人々々の心には、必ず數人かづつの子供が共にいる譯である。親子のことを聽く母達はいつでも眞剣である。その態度はどこまでも實感である。將來のために學ぶ學生や、教育のために研究する教師を前にしているとは全く別の世界である。彼は説くのもなく論ずるのもなく、評するのでもなく、その眞剣と實感とにひきつづられて家庭教育に對する自分の眞剣と實感とを、そのたび毎に強められ切にされるのを感じた。こゝでも多く得たものは自身の方であつた。

2 あ の 村 あ の 町

a 鯛 の 大 漁

『どうも、長くお待せして相済みません』

『村長さん、何人位集つていますか』

『まだ、その……』

七時の開會というのに、もう、一時間半も過ぎてている。さつきから、同行の縣の若い役人が、しきりに氣をもんでいる。

『皆さん忙しいのでしよう』

漁村の集りの遅れることには慣れている。彼は平氣で、波の遠鳴りを聞きながら、二階のですり越しに暮れきつた空を見ている。星がぎら／＼していて美しい。下の帳場のほん／＼時計が、時代はなれした音で、ゆつくり九時をつ。頗る香氣である。

餘りおそくなつては、充分話ができない。さすがに、彼も少し氣になり始める。

『私がかまわないが、何事か起つたんじやないでしょか』

『今、見せにやりましたが、もうやがて……』

夕食の時から彼の相手をして、膝もくすまない几帳めんな村長さんが、のび上るようにして濱の方を見る。そうして、別段のことではない顔をして、

『もうやがて片づきましょう。鯛の大漁でして。女達も濱へ總出で働いておりますんで……』

『あゝ、そうなんですか。早くそういつて下されば、私も手傳いに出たんですのに、ハハハ、。大漁は結構でしたね』

『へえ、えらいむれが寄りまして……』

『家庭教育の話どころじやありませんね。子供らは、どうしています』

『みんな、一緒に濱へ出て手傳つています』

『親子近所隣らず揃つてですね』

『まゝこういうことが、ぶつかりまして』

『鯛は、家庭教育の集りのあることなんか知りませんよ、ハハ、……』

やがて迎えに來た校長さんに暗い坂道を案内されて、學校へ行つた。教室を二つつゞけた会場には、母達が一ぱい集つていた。濱からのそのまゝの姿である。鯛のにおいがするような氣がした。曳き網から磯の砂へ、びんくはねかえるフレッシュな魚の香が。

『鯛の大漁でしたつてね。あした御馳走になりたいですな……』

びつくりするほどの大きな笑い聲が皆から起つた。

『いわしことというのは、親鯛と別なんですか……』

聲を出して答えたおばあさんがある。また大笑が起つた。房州外洋の溝を前にしてと同じ大騒だ。子供たちもわめいていたが、そのうち前列の二三人が、母の隣に頭をのせて眠りだした。今夜は打ちとけた話あいができるなど、彼は椅子に腰をおろした。立つて話すと講話になつていけない。講話では今まで生き鯛の腹をさいていた母達と生きた話しあいはいできない。

翌朝、歸りのバスの中で、縣の人と話した。

『昨晚は、どうも、とんだ……』

『愉快でしたな。あれでこそ、忙しい母達のところへ出かけて行つた氣がします。あの待つている間こそ、私の仕事だつたのでした。教育より漁の方が生活ですからね』

好 き 聴 き 手

『先生さま、ありがとごせえました』

山間の會場へ彼を送つて來て、そのまゝ待つていた車屋さんが、彼を乗せて驛の方へ歸る途中である。會場を出た

時は勢よく驅けたが、さつきから、少しのろ／＼になつた。道がのほり氣味になつたせいかと思つてゐると、突然いゝ出したのである。

『わしらのようなもんでも、親でござえますあ。子供らに濟まねえとばかり思つていましたが、親に變りはねえことを、よく分らせてお貰い申しました。お話を聞いて、わたしやあうれしくつて、涙が出ました』

『子供さん、幾たりだね』

『五人』

『おかみさんは、たつしやかね』

『それが、長くわすらつてまして』

勿論、行く手を向いたまゝで、足はいよく／＼おそくなる。

『そりやあいけないね』

『へえ、だが、子供の世話だけは、よくしてくれませんか。わたしやあ、だめですが』

『こつやつて稼いでいる親父が、だめつてこたあないじやないか』

『いやもう全くのたためでござえますし、貧乏で全くだらしがねえんで、全く、子供らに親の顔もできねえと思つてましたら、先生さまのさつきのお話じやあ、それでも親だつて……』

勿論、顔は見えない。一寸前かゞみになつて、力はいつてゐる黒い首すじに汗がにじんでいる。

『先生さま、親は親でござえますあねえ』

『そうだと君』

『こつなれ、あゝなれとおつしやらねえで、そのまゝで親だ、と、おつしやつて下さつた時、わたしやあ、胸へぐつと……』

『あたりまえの話さねえ』

今日集つていた人達は、みんな素樸な村の人だつた。彼にとつては最も貴い聴衆だつた。彼は東京の上流夫人の集りにも招かれゝば行く。母でさえあれば、皆大切な聴衆だ。しかし、今日のような人達の方が、彼の話したいことをよく分つてくれるといつも思うのである。話し甲斐もあるといつも感じさせられるのである。

驛のある町へ来た時、もうとうに話題は變つていたが、

『子供達、かわいがつてやんなさい』

彼は車をおりながら、その人のいい顔を初めてよく見た。こういうのが、好き聴手というもののなのであろう。好き聴手は思いがけないところにある。四國のある町の會場の下足番のばあさんもその一人だつた。その町へ再度招かれた二年目の時、出迎への土地の夫人達の後方に、服装の貧しいばあさんがいた。夫人達の中の一人がそのばあさんを彼の前につれて来て、

『お覚えがありませんか。會場で働いて貰つてゐるばあさんで、先生の大變なファンでございまして、こんにちも是非お出迎えがしたいと言われますので……』

ファンといふながら、その夫人も微笑を浮べたが、彼も笑い出さずにはいられなかつた。が、後で會の人達に聞くと去年の時以來、このばあさんは、その時の彼の話を、誰れ彼れにとなく繰り返して聴かせるのだそうだ。そうして再び彼を迎えることを、誰より喜んで待つていてくれたのだそうだ。そこで夫人達の間にファンという言葉が使われるようになったのだそうだ。彼の話は、いつでも、會場で一番文字や理窟のなさそうな層をめあてにするようになつて仕舞うのだが、その年の話が、またしても、此のファンを話相手にしていることを、會場の何人が気がついたらうか。このばあさんに道樂息子があり、二人の孫があるという話は、後で聞いた。

ファンではないが、一寸面くらつたのは、或る町での會場の後部に、數人の藝者が坐つていたことである。紫人づくりで、つましく控えてはいるが、それと分らないことはない。會の幹事の惡趣味かとも思つたが、彼は構わないとしても、顔を知つてゐるであらう町の夫人達には、どんな感じを與えるだろうかと少々氣になつた。とにかく『我子の家庭教育』という講演會には、なんだか似あわしくない聴衆である。ところが、講師のそうした氣もちが通じたものか、あの藝者の中の三人は子持だからという走り書きの紙片が彼の手に渡された。そうなのかえ、彼はいつもの通り話を進めたが、その一團は他に譲らない熱心な聴き手だつた。其晚、特にその人達からといつて一籠のくだものを宿へ届けて來た一夫人は、

『大層いゝお話をしてあげて下さつて』

といつたが、彼は、格別變つた話をしたのではない。いつもの通り、母と語つただけのことであつたが、これも好

き聴き手の一種であつたのであろう。

c に が 手

好き聴き手ばかりではない。悪き聴き手という譯ではないが、彼にとつて苦手だつたのは、上流マザーと、インテリマザー連の集りである。その人達の理解と教養とは、好き聴き手といわなければならぬ譯だが、彼の話を感受するに必要な、母の苦勞や、母の謙虚や、母の本然が足りない。我が子をよく教育したいという心は疑われないが、その注文が先に立ち、その誇りが後ろにあり、みえさえも横にあつた。それも免れ難いことだろうとして、最も困るのは、觀念を喜び、理論を楽しもうとする癖である。その人達を母の形式、理想の母から生地の母に還すことには、彼はいくらでも勞を惜しまなかつたけれども、書物や文字の包装を破つてその人達の母の實感に觸れることは、彼にとつて苦手であつた。實をいえば、彼自身、そうした包装の持ち主であつて、車屋さんや、下足番のばあさんや、庶子の母などにぶつかつてこそ、その包装が破られる方なのだから、相手によつては語るに包装を以てするようなことになつて仕舞う。我れながらもどかしさと齒がゆさに終ることが少くない。そんなうわつらのことでは、行脚僧の修行にならなく。

3 滿鐵に沿うて

彼の行脚は、幾たびか、滿鐵沿線に延びた。この一本の黒い鐵路に沿うて、遠く異國に深入りしている日本の家庭には、内地の家庭とは別な悩みがある。同じ經驗を持たない彼にとつては、むづかしい問題であるが、教えながら、いつしよに考へるために、招きに應じた。

滿鐵は、その大規模な企畫の中に、教育のことも充分意を用いていた。沿線主要地には堂々たる校舍を建て、地方独自の教科々程を立案し、その生活に適切な教科書を編纂し、多くの教師を内地から招聘していた。しかし、各戸の家庭教育は會社の力で規定することはできない。殊に植民地家庭の微妙な教育的特色が伴う。自然社會共に環境が内地と異なる。郷里のこせしめた窮屈はないが郷里を離れた放縱がある。新らしい長所もあるが熱しない。舊い弊はら

くに棄てられるが守るところを失う。その上、日常にゆとりが多くて有閑に流れる。型のはまつた内地の母とは別の意味で、よい母とそうでない母との開きが大きい。——これが彼の第一印象であつた。

自由と規範とは、いつも家庭教育の根本の問題である。満鐵の母達は格別にこの問題に迷つてゐる。家に年寄りか居りませんので、近所に古いおつきあひがありませんので、墓参といふことがありませんので、氏神といふものがありますので、二重橋を知りませんので——これが度々彼の聴かされた母の聲だつた。

満州の人間にしてしまつていゝのでしようか。やがては歸る内地の人間に育てなければならぬのでしようか。今はこゝの暮しをしています、いつまでもこゝに居るのではありませんし、學校も、どの邊から内地のいゝ學校に送つたものでしようか、女の子はだん／＼年頃近くなりますと、嫁入りの仕度もありますし、どうも教育の方針が落ちつきませんで、——内地へ歸れば、局長とか、所長とかを考へてゐる夫人達の疑問である。しかも、だん／＼奥へはいると、大きい驛ばかりではない。それに、線路を僅か離れると日本の管理下でなくなる。一望の高梁畑の中の舍宅は、心配すれば四方馬賊の圏内でもある。その點々とした小さい家に、若い妻君が、幼い子を抱いて、出張がちな夫の留守をまもつてゐるのである。國勢延長の職務とはいへ、沈む夕日、また／＼星、シグナルの青い灯、今通つた實際列車の遠い汽笛、淋しさが思われる。そこで、富士山の油繪をはつた壁にもたれて、日本の子守り唄をうたつてゐる若い母の姿こそ、大連の星ヶ浦の夫人達よりも、奉天の城内の奥さん達よりも、最も彼の心をひいた満鐵の母であつた。

母は教える前に慰むべき人である。導く前に勞わるべき人である。家庭教育行脚の心は、説く前に先づ勞わることである。戒める前に先づ察することである。悩みを解決する前に先づ共に語ることである。語るよりも寧ろ聴くことである。

どの母でも、その子の母である。家庭教育行脚の要諦は、その母にその子の母たる喜びと幸福とを感謝せしめることにある。輕々しく理想の母を論じ、容易に賢母の範を示し、母を恥じしめ、母を苦しめてはならぬ。すべての母は悲願の母である。その悲願もまた、その母その子、決して同じくない。それに對し、もとより觀音三十三種の化身はかなわずとするも、すべての母の哀思の一つをでも救う一助となりたいのが、凡力行脚の念願である。

(つづく)